

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25760009

研究課題名(和文)パレスチナ人のナクバの歴史記述研究 オーラルヒストリーの可能性

研究課題名(英文)The Study of the Historiographies of the Palestinian Nakba: The Possibility of Oral History

研究代表者

金城 美幸(KINJO, MIYUKI)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号：80632215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、パレスチナ/イスラエル紛争をめぐる両社会の歴史認識論争の中で生み出されてきたパレスチナ人の歴史記述の重要な特徴を明らかにした。その特徴とは以下の3つである。第一に、1948年のイスラエル建国により崩壊したパレスチナ人村落についてはオーラルヒストリーによる地誌が量産されされてきた点、第二に、これらの地誌は公式の文字史料中心のイスラエルの歴史記述に対抗するために生み出されてきた点、そして第三に、多様なパレスチナ人民族アイデンティティの表現の場となっている点である。

研究成果の概要(英文)： This study reveals three important characteristics of the Palestinian historiographies that have been created within the historical dispute among the Palestinian and Israeli historians concerning the conflict. Firstly, a large number of topographies of the Palestinian villages that have been destroyed in 1948, when the State of Israel was established, have been published based on oral history. Secondly, these topographies were published in order to counter the Israeli historiographies that mainly depend on written official documents. Lastly, such topographies have served as a forum of presenting diverse forms of the Palestinian national identities.

研究分野：パレスチナ/イスラエル地域研究

キーワード：パレスチナ イスラエル 歴史認識 オーラルヒストリー ナクバ

1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀末、反ユダヤ主義とナショナリズムの高揚を背景として、一部のヨーロッパ・ユダヤ人の間でパレスチナ(シオン)におけるユダヤ人国家の復興を目標に掲げたナショナリズム運動、すなわちシオニズム運動が誕生した。シオニストたちはパレスチナへの入植活動を開始し、1948年、ついに運動目標であったイスラエルの建国を果たした。しかし、イスラエル建国は、先住者パレスチナ人の組織的追放によって達成されたものであり、以降パレスチナ人は60年以上離散、被占領、難民化の歴史を歩んできた。パレスチナ人社会では、この1948年という年は「ナクバ(アラビア語で「大災厄」の意味)」と呼ばれている。

(2) パレスチナ人社会では、ナクバの歴史研究を通してその因果関係を説明することは、難民の故郷への帰還の権利(難民帰還権)を要求するための重要な作業となっている。しかし、ナクバの歴史研究における問題は、ナクバを伝える史料も離散してきたという点にあった。それゆえ、パレスチナ人は長年のイスラエルの公式見解、すなわち、パレスチナ人はシオニストの組織的追放によってではなく彼らの社会の指導部から出された退去指示に従って土地を離れたとする主張を切り崩せないままであった。

(3) ナクバの歴史研究は1950年代に残された史料を活用するかたちで始まる。主たる作業はイスラエル建国によって破壊された300以上の村を再構成する地誌研究であった。しかし1980年代以降、ナクバ体験者の地域性や階級性、ジェンダー、世代間差異などを焦点化する必要性が唱えられ、より幅広い民衆の証言の集積、すなわちオーラルヒストリーが重視されるようになった。

(4) しかし、オーラルヒストリーにおいて重要となってくるのは史実性、すなわち語られた内容が事実であることが確認できるか否か、である。この点はイスラエル人歴史家たちがパレスチナ人の証言の史実性を一切認めない立場を貫いているという、政治に規定された学術的状況においてはとりわけ深刻な問題である。そして近年のパレスチナ人の歴史研究では、地誌やイスラエル側の史料と照合させながら証言の分析が行われるようになってきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、紛争下パレスチナ人社会におけるオーラルヒストリーの構築過程を明らかにすることである。パレスチナ人のオーラルヒストリーの方法論、実態、課題の調

査を通して、パレスチナ人の歴史研究の知的現状を明らかにする。

3. 研究の方法

離散状況にあるパレスチナ人社会は地域的にも広がりをもっているが、本研究では、イスラエルとの対決の「前線」に位置するヨルダン川西岸地区(以下、「西岸」)におけるパレスチナ人の歴史研究を対象とする。(ガザ地区に関しては渡航が困難な状況にある。)具体的には、1980年代から西岸に位置するパレスチナ人の大学、ビル・ゼイト大学で進められてきた破壊されたパレスチナ人村落について出版されてきた地誌シリーズを取り上げる。これらの地誌シリーズは「破壊されたパレスチナ人村 al-Qurā al-Filasṭīniya al-Mudammara」シリーズとして出版されており、地理学者 Kamāl ' Abd al-Fattāh、人類学者 Sharīf Kanā ' nā、歴史家 Sālih ' Abd al-Jawād(Saleh Abdul-Jawad)らによる学際プロジェクトとなっている。パレスチナ人のオーラルヒストリー研究のなかでも、もっとも組織化・制度化されたものである。同シリーズでは、破壊された村ごとの証言が1冊におさめられ、これまでに27冊、つまり27村についての地誌が出版されてきた。

4. 研究成果

(1) 科研費の受給により、通算1年3か月の現地長期調査が可能となった。これによりビルゼイト大学から出版された地誌シリーズ全巻の収集、歴史家たちへのインタビュー、パレスチナ難民への聞き取りを通して、方言の引用を多用するオーラルヒストリーについての読解・分析に必要な知識の習得ができた。

(2) 本研究の成果については、口頭発表・講演会発表・研究ノート発表の形で発信している。本研究を国内外の研究に位置づけると、ローカルな形で生産・消費されてきた数多くのパレスチナ人のオーラルヒストリーの変遷を概観し、ナショナルな歴史認識論争の文脈に位置づけなおした点にその新規性がある。とくに国内の研究のなかではパレスチナ人のナクバのオーラルヒストリーの重要性が指摘され続けながらも、それを対象とした研究は存在してこなかった。また、海外の研究においても、これらのオーラルヒストリーの特徴は、多様かつ外部からの研究者にとっては難解な各地域・村落の方言によって記述されている部分が多いという点から、まだ十分に着手されていない研究分野となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①金城美幸. 「反二国家解決としてのオスロ・プロセスと新たな和平言説の誕生」(今野泰三・鶴見太郎・武田祥英編)『オスロ合意から 20 年 パレスチナ/イスラエルの変容と課題』NIHU イスラーム地域研究東京大学拠点中東パレスチナ班発行(査読なし研究ノート)、1 巻、2015 年、pp.21-35

②金城美幸. 「破壊されたパレスチナ人村落史の構築 対抗言説としてのオーラルヒストリー」『日本中東学会年報』(査読あり研究ノート)第 30 巻 1 号、2014 年、pp.129-146..

〔学会発表〕(計 3 件)

①Miyuki KINJO and Taizo IMANO. "From Conflict Resolution to Conflict Management: The Transformation of Israeli Labor Party during the Peace Process." The 10th Conference of Asian Federation of Middle East Studies Associations (AFMA), Dec. 14, 2014. Kyoto University (Kyoto-shi, Kyoto).

Miyuki KINJO "Reconstructing Palestinian Topography, Recreating Palestinian Nationality." International Geography Union Kyoto Regional Conference, August 7, 2013. Kyoto International Conference Center (Kyoto-shi, Kyoto).

③金城美幸. 「パレスチナ人のナクバとオーラルヒストリー ビレッジ・ボックスの考察を中心に」日本中東学会第 29 回大会、大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市) 2013 年 5 月 12 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

・アウトリーチ活動(口頭発表)

①金城美幸. 「ポスト・オスロ体制へ? パレスチナ独立国家承認への歩みとその弊害」立命館大学国際地域研究所途上国研究会主催、2015 年 3 月.

②金城美幸. 「パレスチナ村落地誌の作成とナショナル・ヒストリーの構築」大阪市立大学文学部地理学研究室主催コロキウム・大阪市立大学人権問題研究センター共催、大阪市立大学、2014 年 7 月.

金城美幸. 「『和平』と『和解』のはざままで 和平プロセス期イスラエルにおける歴史認識の変容」立命館大学国際関係学部末近浩太ゼミ主催・立命館大学 R-GIRO 研究会「新しい平和学にむけた学際的研究拠点の形成:ポスト紛争地域における和解志向ガバナンスと持続可能な平和構築の研究」(代表者:本名純)共催、立命館大学、2014 年 7 月.

金城美幸. 「変容する『和平』概念 オスロ和平プロセスと二国家解決」京都YWCA ブクラ主催学習会、2014 年 6 月.

⑤金城美幸. 「パレスチナ/イスラエルにおける歴史学的知の生産 生成・変容とその基盤」NIHU イスラーム地域研究東京大学拠点グループ 2 中東パレスチナ研究班研究会、東京大学東洋文化研究所、2014 年 5 月.

・翻訳

ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラー、ジュディス・バトラー、コーネル・ウェスト、クレイグ・カルフーン著、エドゥアルド・メンディエッタ、ジョナサン・ファンアントヴェルペン編、箱田徹・金城美幸訳『公共圏に挑戦する宗教 ポスト世俗化時代における共棲のために』岩波書店、2014 年 10 月.

・ホームページ

<http://www.arsvi.com/w/km19.htm>

6. 研究組織

(1)研究代表者

金城 美幸 (KINJO MIYUKI)

立命館大学衣笠総合研究機構研究員

研究者番号：80632215

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：